

農政産業観光委員会 県外調査活動状況

1 日 時 平成25年9月2日(月)～9月4日(水)

2 出席委員(9名)

委員長 石井 脩徳

副委員長 久保田松幸

委員 武川 勉 河西 敏郎 桜本 広樹 皆川 巖

渡辺 英機 鈴木 幹夫 土橋 亨

3 欠席委員 なし

(1)【(株)アレフ 北海道工場(多様なエネルギー源を有効活用する独自の総合利用システムについて)】

主な質疑

問) (株)アレフの前身はどのような会社だったのか。

答) 全くの創業である。創業者は2年前に亡くなったが、もともとは田舎の駅前の旅館を経営していた。将来立ちゆかないということで、商工会等のいろいろな勉強会に顔を出し、その中で飲食店に決めたようだ。

問) ハンバーグから始めたようだが、どういうきっかけか。

答) 創業は昭和43年であるが、そのわずか2年後、昭和45年の大阪万博のときに、マクドナルドとケンタッキーが日本進出した。その前に海外視察でアメリカへ行って、現地でマクドナルドを見たようだ。どうやらマクドナルドが日本に進出してくるらしいということで、日本に帰ってきてすぐに、ハンバーガーのパンを外して、御飯と味噌汁とハンバーグのメニューにしたそうである。

問) 年間延べ6,000万人の客が来店しているということだが、1日当たりだと約16万人になる。全国に330店舗あるので、1店舗当たりで1日に450食以上の売り上げがあるが、ノウハウの中に、メニューを安く提供するということがあるのか。

答) 単価は安い。先代の社長は、お客様に長く喜んでもらうためには、なるべく薄くもうけるということをやっていた。

問) 甲府にあるびっくりドンキーも売り上げはいいのか。

答) 甲府店もいい。一番売り上げ成績がいいのは、関西地区と東北地区、北海道である。
関西地区は1店舗当たりの売り上げがとても多い。関西で受け入れられるのは、とても自信になる。関西の方は自分たちの価値を見いだすときに、価格とバランスが直感的である。

問) 他県への進出が著しくて、経営手法がすごいと思う。

答) フランチャイズという手法を取り入れている。どうしても直営だけではスピード展開できない。それだけ資金と人の手当てが必要であるが、加盟店の力を借りると、店づくりの資金と人は加盟店が準備してくれるので、スピード展開できる。店が受けているうちに、全国にびっくりドンキーの味を届けて、社会貢献したい。

問) 加盟店から得る収入はどれくらいか。

答) ロイヤリティとして売り上げの2.2%を頂いている。レストラン業だと通常は5%くらいなので、2.2%というのは安いと思う。

問) フランチャイズと直営店の割合はどれくらいか。

答) フランチャイズが6割くらいである。これからもそんな割合でいくと思っている。
フランチャイズにもいい面と悪い面がある。直営店は直接コントロールが可能だが、フランチャイズの場合は間接的なコントロールになってしまう。

問) フランチャイズ店で提供するメニューは直営店と同じか。

答) そこは厳しくて、同じものしか提供できない。
フランチャイズにも2通りあって、ゆるいフランチャイズもある。単品だけ決めて、組合せは自由なところもあるが、びっくりドンキーは本部で全部決めている。
法律上の問題があって値段は決められないので、本部で決めているのはあくまで推薦価格である。

質疑終了後、施設内の視察を行った。その後、(株)アレフと共同で牛ふんと生ゴミのバイオマス化などによるリサイクルの取り組みをしている農事組合法人細澤牧場の視察を行った。



(株)アレフ北海道工場での施設内視察の様子

(2)【(一社)エゾシカ協会(エゾシカの保護管理と被害防止、有効活用への取り組みについて)】

主な質疑

問) エゾシカの体重は平均どのくらいか。

答) 成体獣でいうと、雌で80キログラム、雄は100キログラム以上になる。

ただ、肉はかたくなるとおいしくないので、雄だと2、3歳、雌は年齢はあまり関係ないのだが大体5、6歳とすると、体重は80キログラムくらいである。

問) 昨夜、エゾシカ肉の料理を食べたが、やわらかくて臭みもなく、とてもおいしかった。

13カ所に肉処理場があって、狩猟する人は撃ったエゾシカを自分の車等で持ち込むのか。

答) そうである。

問) 2時間以内に処理をしないと、血が回ってだめだという話を聞くがどうなのか。

答) いろいろな状況によって変わると思うが、一つには食品衛生法で、捕獲した個体をそのまま処理場に運ぶことになっている。自家消費や海外を含めて、捕獲したものは現場で内臓を出すのが通常で、ハンターも普通に行っていたが、食品衛生法でそう書かれている。

また、野外で内臓摘出した場合は、内部の消毒などが必要になる。自家消費はいいのだが、流通するものについてはどうなんだということで、基本的には処理場で内臓摘出を行うことにしている。

問) 一般の人が野外で内臓を摘出すると、埋設処理をするのか。

答) 内臓はそうである。

問) どこにでも穴を掘って捨てていいのか。

答) 環境省の告示ということでは、原則は持ち帰る。やむを得ない場合は、生態系に影響を与えないように適切な方法で埋設をするというルールになっている。

問) 食べる場所は少なく、捨てる場所のほうが多いと思うがどうか。

答) そうである。

問) 捕獲すると1頭当たり幾らかもらえるのか。

答)市町村によってその金額は異なる。農林水産省の特措法の上積みが8,000円である。北海道の場合、今までは5,000円くらいのところが多かった。

被害防止計画を出している町村については、5,000円のうち8割が地方交付税で戻る。その5,000円プラス8,000円で、ことしの4月は13,000円である。

問)捕獲した証拠として写真を撮ったりするのか。

答)そうである。あとは耳や尻尾などがあるが、市町村によって異なる。処理場に持っていかないとだめなところもあるし、写真のところもあるし、さまざまである。

問)私の友人が冬の前の猟期にエゾシカを撃ちに来るのだが、そういう人たちも撃ったら証拠となるものを出してお金をもらっているのか。

答)市町村の考えによると思うが、基本的に狩猟期にはお金は出ない。駆除、許可捕獲に対してお金を上積みしているのだから、狩猟で来られた方にはお金は出ない。

問)3頭獲ったから、おいしいところだけを山梨に送って、残りはどこかへ埋設して帰ってくると聞いた。山梨県でも何とか埋設施設をつくらなければ、猟友会の人ギブアップしてしまうという話がよく出る。山の上で獲って自分で穴を掘ってといっても、山に穴なんか掘れない。大月市のほうに1カ所だけ焼却場があるらしいが、そこまで運んでいけないし、他人の山に穴を掘って捨てるわけにもいかないし、野ざらしにするわけにもいかない。

答)家畜ではないので、法的にはへい獣施設等の必要はないが、環境に影響がないようにしなければならない。2頭、3頭ならいいが、大量に処分するとなると、例えばそこに熊が来て掘って食べるとか、いろいろな問題が考えられるので、単なる埋設というのはかなり問題があると思う。

焼却処理には、燃料代等ものすごいコストがかかる。

人間も含めて、動物の体の大部分は水分なので、今、試験的に行われている減容化発酵処理というのは、その後どうするかは別として、エネルギーをかけることなく水分を抜いてやれるので、処理は非常に楽になる。

処理場から出たものは産業廃棄物なので業者に出さなければならないが、ハンターが獲った自家用のものは一般廃棄物なので生ごみと一緒にだが、後は各市町村の考え方による。

鹿を獲るのはいいけれど獲った後どうするかという猟友会の話は、十数年前から北海道でも同じで、その辺をきちんとできないと協力できないということだった。結局、市町村、処理場の処理が回らないということで、減容化処理が始まった。

問)山梨県でも、個体数が減っている状況ではない。電柵を使って、また国、県の補助を受けて市町村がみずから柵を設置しているが、今後10年を見て、もっと有効な方法を

用いないと鹿等の被害を減らすことはできない状況である。北海道でも同じだと思うが、方策として今後、猟友会の力を借りるにも限度があるし、狩猟者も高齢化で免許を返納してしまう方も多いので、イタチごっこのような状況になっている。北海道でもオオカミも絶滅しているし、今後エゾシカの個体数が減っていく可能性はないように感じている。雄鹿を撲滅していくような方法も考えなければならないと思うが、対策的にはどうしたらいいと考えているのか。

答)もう結論は出ている。フェンスは対処的な方法で、個体数が減るわけではないが、今、困っている農家としては有効である。ただ、農地に張れば隣地に行ってしまう。

基本的には捕獲しなければいけないが、誰が、どのお金で、どうやってやり続けていくのが問題である。北海道の場合、猟友会で対応ができる町村は、国の施策である特措法にのった捕獲隊などいろいろな支援策を使っている。非常に難しいのが湿原等の保護区、自衛隊の演習地などハンターが入れない場所である。また、いろいろな兼ね合いがあるが、縄張り意識のようなことから、地元のハンターはよそから来るハンターを嫌う。そういうことを考えて、環境省では専門家捕獲、捕獲チームの認証制度などについても検討している。また、諸外国で行われている銃による夜間捕獲についても検討事項になっているが、一般ハンターによるものはどの国でも禁止しており、空港など顕著な被害がある場所では専門家による捕獲を許可している。そういうことも含めた資格制度を環境省では検討している。

専門家による捕獲体制とあわせて、生息状況、地元の誰にどういうふうに関わり、いつ捕獲するのかコーディネートする人材が大切である。獲り方も、今のやり方でむやみに撃つと、スレジカ(スマートディア：生き残った鹿の警戒心が高まり、捕獲効率が低下する)をふやしてしまい、撃てる時間や撃てる場所には鹿が出てこなくなってしまう。スレジカをつくらないように捕獲する方法として、シャープシューティングなどもあるが、行政または大学の研究機関を含めて、それをコーディネートする人材をつくるのが重要である。

問)こんなに被害があるのだったら、狩猟する株式会社をつくって専門に狩猟したらどうか。

答)非営利の株式会社もあるが、基本的に営利は無理である。というのは、頑張っても狩猟をすれば個体数が減り、仕事なくなるからである。有効活用もそうで、処理場をつくってどんどん獲っていくと、資源がなくなったら処理場も成り立たない。

問)莫大な被害金額のことを考えたら、例えばその10分の1くらいの金額を出してもいいのではないかと思うがどうか。

答)農林水産省や国土交通省など、問題がいろいろな部署にまたがっている。私が問題だと思っているのは、厚生労働省も含めて規制官庁がたくさんあるが、所管が一元化されないことである。政治によって主導していただかないと、事務方だけでは対応が難しい問題だと思っている。事務方のセクションが分かれており、また2、3年で職員は異動

してしまうので、10年先を目標けて施策を打ち出していくということは、なかなか難しいと思っている。

問) エゾシカ肉は食べておいしかった。山梨の鹿は大きくないので、おいしくない。

答) 長野県でも一生懸命取り組んでいるが、料理の仕方が重要である。長野県や兵庫県でも苦労されているが、小さい分だけ当然コストがかかる。それと、特に山が切り立ったような地形なのでさまざまな問題はあるが、獲ったものは活用していくことが大切だと思う。

問) 先日の朝刊に、南アルプスで鹿の捕獲を行ったが、天候が悪くなって1頭も獲らないで帰ってきたという記事が出ていた。音だけでも逃げてくれればいいと思うのだが。

答) 音にはすぐに慣れてしまう。



(一社)エゾシカ協会の概要説明、質疑の様子

(3)【葛巻町新エネルギー施設・くずまき高原牧場(クリーンエネルギーへの取り組みについて)】

主な質疑

問) 山梨県の場合は、既に太陽光を利用したメガソーラーや小水力発電に取り組んでいるが、風力発電には適さないと言われている。風力発電というのは、今までの我々の認識では、海外沿いの一定の海風を利用するとか、あるいは最近では海の上での風力発電がある。山梨県の場合は一定の風が吹かないので、風力発電はできないと思っていたのだが、こうやって山間地においてもできるということで非常に驚いた。一定の風が確保できているということか。

答) 風力発電事業を行うためには、一般的に年間平均風速6メートル以上が必要であると言われている。そういった中で当町においては、エコ・ワールドくずまき風力発電所のある袖山高原で年間7.2メートルほど、グリーンパワーくずまき風力発電所のある上外川地区で8メートル強の風が吹いていて、非常に風が強い場所である。経済産業省の出先機関であるNEDO(新エネルギー・産業技術総合開発機構)のホームページにも日本の風量マップがあり、葛巻町がある北上山系のあたりは赤く色づいており、風が強い地域ということがわかる。

ただ、海外沿いとは異なり、一定の風が吹いてくるわけではなく、いろいろな方向から吹いてきていて、海岸に比べたら安定した風ではないかもしれないが、風力発電を稼働させるための風量としては問題ない状況である。

問) 全然、風が吹かない日もあるのか。

答) そういう日もある。

問) そういう日はどう対応するのか。

答) 結局、風任せであるが、風速3、4メートルほどで風車が回る仕組みになっているので、通常私たちが肌で感じるくらいの風が吹けば、風車は回る。

問) 各集会所へ蓄電池を整備する費用はどのくらいかかるのか。

答) 太陽光発電が25カ所合わせて182キロワット、2.6キロワットアワーの蓄電池を数台ずつ設置して合計114キロワットアワーであるが、これら全てを合わせて1億6千万円ほどかかった。

問) 太陽光発電の規模によって異なると思うが、1集会所あたり幾らくらいかかったのか。

答) 規模はまちまちであるが、2キロワットから9キロワットの太陽光発電を設置してい

る。太陽光発電が1キロワットあたり70万円から80万円くらい、蓄電池が1台80万円ほどである。

問) 発電した電力は、全て売電しているのか。

答) 風力発電に関しては、全量売電している。今の電気事業法では、特定電気事業者でない限りは自分で供給できないので、結局は売るしかない。

その他のバイオマスや太陽光については、あくまでも自家発電という位置づけなので、自家消費をして、太陽光の余剰分は売電している。あくまで売電を目的として設置しているものではない。

問) 風力発電の売電収入がエコ・ワールドくずまき風力発電所で約2,000万円、グリーンパワーくずまき風力発電所で約4億3,000万円あるということだが、どのような形で町の収入になっているのか。

答) どちらも町が事業主体の風力発電ではなく、エコ・ワールドくずまきは第3セクター、グリーンパワーくずまきは民間の企業が経営しているので、売電収入は町には入らない。したがって、町に入ってくるのは、固定資産税や町の土地を風力発電事業者に貸している借地料だけである。

問) 風力発電事業は雇用の創出に結びついているのか。

答) エコ・ワールドくずまきは非常に規模が小さいので、職員は常駐していない。母体となるエコパワー(株)という東京にあるベンチャー企業の職員が、1名専従している。メンテナンスは青森県六ヶ所村にあるエコパワー(株)が持っている風力発電所と共同で行っており、事務所が六ヶ所村にあるので、葛巻町の誰かが雇用されているとか、在駐しているということはない。

グリーンパワーくずまきは、電源開発の子会社であるジェイウインドというメンテナンス会社の社員4、5名が葛巻町に常駐して、風車の点検等を行っている。

やはり専門的な知識が必要であり、地元の方の雇用の促進には結びついていない状況である。これまでは、そういった取り組みがなかなか評価されない中で、先行的に農村地帯でもエネルギーの生産ができるという実証ができたという意味で、我々は一定の評価をしているが、委員の御指摘のように、今後は雇用の面や、何かしら地域の経済効果が見られるような風力発電事業の取り組みをしていかなければならないと思っている。

その中で、発電した電力を直接、町民に供給し、いわゆる送電ロスをなくして町に供給することで、もしかすると今の23円という電気代よりも安い電気代で町民に供給できるかもしれない。それから、ほかの発電所が原発事故のように故障などにより大規模停電に陥っても、葛巻町では自分たちの発電所があるので、そこから地域住民に優先的に供給して、災害に強い安全・安心な町を目指すということが必要不可欠だと思っている。

問) 固定資産税の収入はどのくらいあるのか。

答) 固定資産税は、平成16年当時で大体6,000万円ほどである。現在で4,000万円ほどになっている。

問) 売電収入が数億円あるが、一般的には事業体として管理経費はそれほどかからないと思う。メンテナンス費用がかかるくらいで、どちらかというと利益が出るのが魅力だと思うが、1企業と1第3セクターとして利益があっても、町が潤うということに十分結びついていないように思う。発生した利益を地域に還元するということが弱い感じがするが、どのように考えているのか。

答) 固定価格買取制度が始まって以降は、23.1円という非常に高い価格で売電できているが、それまでは8円、9円という値段でしか売電できていなかった。それは、火力発電、原発発電に環境価値を若干上乘せし、電力会社が定めた価格で売るしかないという状況で、必ずしも経営がうまくいったわけではない。

そういう中で、実際の投資をして風力発電事業を行うと、もしかすると失敗する可能性もあったので、町としてはそういった事業への投資ではなく、今後の可能性等について民間と一緒にやって取り組んできたところである。

問) そういう意味で、NEDO等では補助率の高い事業を2年、3年と国から融資を受けてやるわけである。また、NEDOでは実証実験など、3年先、5年先の国の政策によって動いている部分もあるので、行政としてもどこかで切りかえていかないと、町民から見ると、発電事業者である特定の企業に対する優位性が強すぎるという誤解を生む可能性もあると思うが、どのように考えているのか。

答) 売電価格が高くなったからといって、自治体が売電事業を行うかといったらそれは違うと思う。お金もうけできるような事業であれば、町として民間事業者の誘致を図って、少しずつでも雇用や税収をふやしていき、それを地域に還元するというやり方が一つにあると思う。

葛巻町が目指していることは、売電をするという行為ではなく、あくまで自分たちの地域で生産されたエネルギーを自分たちが使う仕組みを、今後どうにかして構築させていくことである。その中で、葛巻町にあれば、例えば電気代が通常二十数円なのが十数円で供給できるとか、安全・安心な災害に強い町になれば、都市部から安い電気代を求める人が移り住んでくる可能性もあると思う。もしかしたら人だけでなく、企業がこういった農村に来る可能性もあると思っている。

エネルギーでもうかるといったことだけではなく、そういったエネルギーをきっかけとした相乗効果、地域の活性化を目指しているところである。



葛巻町新エネルギー施設・くずまき高原牧場での概要説明、質疑の様子

(4)【久慈市議会（観光振興への取り組みについて）】

主な質疑

問) 山梨県の場合は、以前、武田信玄公を題材にしたNHK大河ドラマ「風林火山」が放映された。「風林火山博」という博覧会会場をつくって公開していたときは、連日、大型観光バスが来て、観光客が相当入ったが、放映が終わってしまうと観光客が減ってしまった。これはやむを得ないと思うが、一番大事なことは、一過性のブームに終わらずに、どうやって継続していくかということだと思うが、何か対策はあるか。

答) 私どももそこを一番心配している。やはりドラマが終わってしまうと、減り方はともかくとして、どうしても減ってくるだろうと思っている。

いい解決策というのはなかなか思いつかないが、来年度に再建予定の「もぐらんぴあまちなか水族館」や海女センターを中心に、観光をPRしていきたいと思っている。

この5月に、陸中海岸国立公園が名称変更により三陸復興国立公園となった。また、環境省が推奨するグリーン復興プロジェクトの中で、青森県から福島県までの700キロメートルを遊歩道でつなぐ「みちのく潮風トレイル」という計画があり、今年の10月に八戸市から久慈市までの部分が一部開通する。それからもう一つ、三陸の中でジオパークという構想があり、認定に向けて日本ジオパークに申請をしようとしているところであるが、今月末から来月あたりに結果が出る。そういった新たな観光の目玉になるような部分が出てきているので、その取り組みによって交流人口の拡大につなげていきたいと考えている。

具体的には、遊歩道を歩くツアーや、またジオの地層の関係で久慈には琥珀という強い観光資源もあるので、「あまちゃん」の部分も含めて、そういったものを取り込んだツアー造成により、客足の減少に歯止めをかけ、アンケート調査結果をもとに観光客のニーズを把握しながら取り組みを進めていきたい。

問)「あまちゃん」の撮影には地元の方がエキストラとして協力してくれたようだが、山梨県の場合は「風林火山」の後、フィルムコミッションとあって、いろいろな映画やテレビドラマの撮影を誘致して、ドラマに出てくれるエキストラを登録しておいて、いつでも受け入れられる体制をつくった。久慈市ではそういう考えはないのか。

答) 朝の連続テレビ小説「あまちゃん」支援推進協議会という組織をつくって、エキストラの部分にも取り組んだ。正直なところそこまでの話には至っていないが、このぐらい効果があるということは実感したので、今後検討していきたいと考えている。

質疑終了後、小袖海岸の視察を行った。



久慈市議会での概要説明、質疑の様子